美学では「老子」はどこに座すのかⅡ

東洋の哲学で用いる道具は何か日本を例にもう一度、考察して見ましょう。（笑い）
ここでも皆さんは「学ぶ道具（具体的な行い）」の選択を決して誤ることはありません。
例えばあなたが茶会に招かれ「正客（しょうきゃく）」の位置に不覚にも、また座ってしまったらどうしますか？
そう！現代の茶会では男性の絶対数が足りないので・・・、気がつくと「アララ・・・・」またですね。
「どのような道具」を持いるのか。いつどのような挨拶をするか、どういう所作をすればいいのか、どんな順序で、お茶を理解しているあなたなら？　迷うことも無く「スラスラ」と・・・
お茶に関するあらゆる作法や所作に精通し、しかもお茶で用いる道具や禅語、歴史、芸術一般に関する豊富な知識を有しているあなたなら・・・・（何が「茶道」かおわかりのようなので・・・・）
狸のしっぽが1本でも2本でも、化かそうとした方が結局、正体を見抜かれるのです。（笑い）
お茶は、たのしいものですよ。　とっても・・・。　作法は自然と身につきます。
時は待ってはくれないのです。
子供に十分すぎる教養が備わるまで「美」は永遠に待ってくれるのだろうか。
たぶん「こうする」と考えたことは「こうならない」ほうがおおいのでは？ 自然ですから。
「道の道とすべきは常の道にあらず」
だから息を潜めて言葉にたよらずあたりの変化に身をゆだねることがたいせつなのでは。
「絶学無憂」
（ 知識を絶対視する考えを絶てば、思いわずらうことも消えてゆくよ）
老子が書き残してくれたものにどれほどの智慧と恵みがあふれているのか・・・。
「前識者道之華而愚始」
（あなたに予知された知識や不安はただいく川の流れにいたずらに流される
時の花のようにはかなく美しいはありませんか？）
（いつでも同じ自分であると意識しているうちにうわべの理解という慢心が頭を擡
げ始めていますよ）
その言葉は、囚われた次元の「鍵」を開き、私たちのこころの次元すら遥かに超越する変化へと誘う。
さて子供達はすでに「茶を味わって」帰るべき遥かな「道」で、今日の影と戯れる。
こんど茶会を開いて「鶴さん」と「えりささん」と「MOMOさん」が来てくれたら
白髪の爺は別室の「こたつ」でカルタ遊びの相手をしてくれそうだ。
アトリエの窓辺には、青い空が　ただ光る。

（行いを見ないで　人を判断できる　人は？・・・いるの　かな？）
やっぱり岡の上の「タヌキ君」だ！